

大学院：学校教育専攻

フィールド演習 後学期

「フィールド演習」後学期

英語プログラム：多読教材の試作 授業評価報告書

英語教育講座 竹永雄二

はじめに

「フィールド演習」後学期の教科（英語）独自のプログラムとして「多読教材の試作」を提案し、履修を希望した3名の院生に対してプログラムを実施した。以下実施内容の報告である。

1. プログラム概要

多読教材として利用される副読本、サブリーダーは、オリジナルな作品の単なる簡略化、平易化ではなく、原作品と同じく、本質的には、読者とのコミュニケーションである。このような立場から、主として中学校英語学習者の動機づけを高め、英語力の向上のために、多読教材の試作を行う。学習者の様々な反応に思い巡らせながら教材造りを実践することにより、英語教師としての資質を高めることを目的とする。

本プログラムにおいては、既存の副読本を参考にして、*Harry Potter series* などの話題作、*Botchan* などの地域文化と深く関わりのある作品の多読教材化を試みる。

2. 到達目標

(1) 英語学習における多読の効果、多読の活用法について理解を深めることができる。

(2) 多読に関する最新の研究を基に、学習者に配慮した多読教材の試作を通して、英語教師としての資質を高めることができる。

(3) 多様なフィールドで試行することにより、教材の改善と同時に自らの課題を発見することができる。

3. 先行研究の調査

まず文献による先行研究の調査により、多読の主な特色と多読の効果が確認されている領域を明らかにした。多読の主な特色としては以下のものが上げられる(Day & Bamford, 1998, pp.7-8)。

- Students read as much as possible.

- A variety of materials on a wide range of topics is available.
- Students select what they want to read.
- The purposes of reading are usually related to pleasure, information, and general understanding.
- Reading materials are well within the linguistic competence of the students.

可能な限りたくさん読むこと、幅広い領域の教材を利用可能にすること、関心があるものを読むこと、リーディングの目的が楽しさや、知識の獲得と結びつけられること、リーディング教材は学習者の言語能力で十分読める、優しい教材であること等が、主な特色として上げられている。

また、多読の効果が確認された領域としては以下のものが上げられる(Day & Bamford, 1998, pp.35-8)。

- second language reading ability
- affect
- vocabulary
- linguistic competence
- writing
- spelling

リーディング、動機、語彙、ライティング、スペリング等、スピーキングを除くあらゆる領域で多読の効果が確認されていることが分かる。

さらに、第二言語としての学習者のための多読教材の課題を確信した。本物教材とは、母国語話者によって母国語話者のために書かれた、言語教育のために特別に書かれたものではない教材であり、言語教育のために特別に書かれた教材や平易化された教材より優れているとみなされている。それに対して、第二言語としての学習者のための平易化された教材とは、原作の表現形式と言

語は保ちながら、短くしたり、ある難しい言葉や文書構造をより平易なものに書き換えたり、ある部分を分かりやすくするために配列し直したり、難しい観念を詳しく説明したりした教材である。平易にはなるが問題点も出てくる。平易化されたテキストは、自然な会話や文章ではなくなること、そえゆえ、堅苦しく、不自然で、真実性が低く、刺激がなくなること、本物のテキストが持つテキストと読者とのコミュニケーションが失われてしまう等の課題が指摘されている。このようなことから明らかになる多読教材試作の課題は、本物のテキストと平易化されたテキストの長所をどのように結びつけるか、優れたリーディング教材の特質である作品と読者とのコミュニケーションを可能にする教材作りということになる。

4. リーディング教材試作

NHK World Reading Room において、英語で朗読された二つの作品の文字起こし、宮崎駿のアニメーション映画『魔女の宅急便』の SCRIPT とストーリーの英語資料を基にした物語りの試作等を行ったが、ここでは前者英語で朗読された作品の一つ、角田光代作 **“ever-traveling book”** について報告する。ラジオ番組で放送された作品に注目したのは、作品が精選された視聴者にとって分かりやすい内容のもではないか、音声と文字として書き起こすことにより、作品制作の疑似体験ができるのではないかと、視聴者とのコミュニケーションを可能にするストーリーと英語表現を体験できるのではと予測したからである。

「旅する本」の概要は次の通りである。18歳の女子学生がコンパの費用を得るために古本屋で本を売る。その後、大学の卒業旅行でネパールを旅する。そこでふと立ち寄った古本屋で、数年前に売った同じ本を偶然見つける。再読してみると以前とはまったく異なった意味を本のなかに発見する。数年後、雑誌の取材の仕事でアイルランドを訪問する。そこでも偶然古本屋でカトマンズで売り払った本と遭遇する。読んでみると本の意味が以前とはまったく異なったものになっている。本との不思議な出会い、読むたびに意味を

変える本、年代や環境の変化に応じて読み手の心の変化を映し出す本、本と読み手のコミュニケーションを主題としているストーリーである。作品と読み手のコミュニケーションを言う優れた多読教材の特質をまさにテーマにしたような点で、興味深い作品と考えられた。物語の始まりは以下の通りである。

I sold a book when I was 18 years old. I was going to leave home and live alone in Tokyo. My room was going to be small, only a size of 6 tatami mats and a rest room. The room seemed even smaller when I had things brought from home and the money my parents send me soon disappeared as I go out for drinks and movies. I decided to sell off all my books and records. I brought out two paper-bags to a quiet second-hand book store in a area at the track of many students. None of the books were valuable or expensive. They were all manga-comics or novels.

5. 授業時間外学習の促進

試作した教材を使用するフィールドとして、本来は、小・中・高の教育現場が想定されているわけであるが、今回は他の試作品も含めて、教室で使用するのに適切な教材を完成するまでに至らなかった。唯一教材として使用可能な作品は、既述の **“ever-travelling book”** であり、この作品を使用するフィールドとして、内容的にも、英語のレベルにおいても大学生を対象とする授業が相応しいと判断した。このような理由から、「イギリス文学史」という3回生を対象にした授業科目で、宿題として課し、1週間後に簡単なレポートの提出を求めた。レポートでは読後感と多読の効果について2つの質問をし、それに対する回答を求めた。以下に、質問内容と、学生の回答の幾つかを示す。

質問 1

このストーリーについて、特に印象に残った部分を中心に（もしあれば）簡単に読後感を述べて下さい。

学生 A: 同じ本でも、それを読んでいた年齢、発達段階によって、感じ方や印象が変わったり、新たな発見があって、世代を超えて読者の心の中に記録されたり、何度も読むことで正解のない皆さんの解釈をできることが本の魅力だと思います。

学生 B: 私は、本を買ったことはありません。しかし、この本を読んで、本が旅をするというのが素敵だなと思いました。本というのは、読む人が変わったり、成長したりすれば、中身が変わるのだと思いました。昔読んだ本を、もう一度読んでみようかなという気になりました。またいま読んでいる本も、大切にしておいて、忘れた頃に読んでみるのも面白そうだと思います。

学生 C: 印象に残った文が3つあります。“I was still naïve and knew nothing of love and all the locations of a country named Nepal.” “Just following the words with my eyes made me feel settled and comfortable.” と “I learned the skills for accepting what would not go well.” です。これらの文を読んだ時、オオ！となりました。

私はこの『探しもの』という本を読んだことはありませんでした。でも、読んでいると、その光景が頭に浮かんでくる時があったり、設定がなんだかおしゃれで、面白かったです。

質問 2

多読（易しい英語で、関心のある作品を、楽しみながら読むこと）は、特にリーディング力を伸ばしていく上で効果があると思いますか。簡単に意見を述べて下さい。

学生 A: 多読の魅力として、知らず知らずの内に英語を読むことができ、リーディング能力（ボキャブラリー、速さ）も向上しているということがあげられると思います。発達段階、興味・関心にあった英文選択や、帯活動として多読を取り入れて行くことが大切になると思います。

学生 B: 興味関心のある作品を読むことはリーディング力の向上につながると思います。私はこの

作品を読んでいて、ある程度内容が分かってきて、続きを読みたいと思い始めると、英語を楽しく読めたし、量も多く感じませんでした。また何度も出てくる単語や表現は自然と覚えていたので、他の文章を読む時に役立つと思いました。

学生 C: 英語で読むことは、日本語の読書と少し違って面白くて新鮮ですが、最後まで頑張って読んだのに結末が面白くなかったら悲しいので、材料の選び方が大変そうだなと思いました。

学生 D: (前半部略) ただ、多読の指導法には、疑問があります。学習者のレベルにあった作品をどう選ぶのか、また生徒に本を読ませるだけでいいのかという点です。参考になる文献を見ていると、多読の効果や導入方法を知ることができましたが、教師の支援の方法が分かりませんでした。

まとめ

日本語の原作を英語に翻訳し、その翻訳版の放送番組による朗読を、聴き取って文字起こしをし（長時間を要したので、授業時間外学習とはなったが）、平易な英語に直し、最終的に多読教材として読んでもらうという、かなり複雑なプロセスになったが、英語の多面的なスキルを活性化する活動になったとも言える。

学生の読後感について言えば、期待以上の反応があって驚いている。『旅する本』の主題とも言える、本は絶えず意味を変化させる、読者は読むたびに新しい意味を発見することに対して、学生たちは敏感に反応していることである。作品と彼らの間に能動的なコミュニケーションがあったことを示すと解釈することができる。

多読の効果については、概ね肯定的意見が多かったように思う。単純なことではあるが、理解し、楽しめることが持続的活動につながって行くという頃である。しかし課題も多い。その一つは学生 D の意見に端的に示されているように、教師の支援のあり方である。学習者のここのニーズに応じた多読教材を紹介すること、個々の読書のプロセスを把握し、必要時に的確な支援をすること、また評価のあり方等、教師の活動としては表に出ないかも知れないが、能動的取組みを必要とする。